

Title	唐代における胡と佛教的世界地理
Author(s)	森安, 孝夫
Citation	東洋史研究 (2007), 66(3): 538-506
Issue Date	2007-12
URL	<a href="http://dx.doi.org/10.14989/138226">http://dx.doi.org/10.14989/138226</a>
Right	
Type	Journal Article
Textversion	publisher

# 唐代における胡と仏教的世界地理

森 安 孝 夫

は じ め に

第一節 インド語漢語対訳字書

第二節 『梵語雜名』の「胡」

第三節 蕃漢対照東洋地図

第四節 『往五天竺国伝』と蕃漢字書断章

第五節 『梵語雜名』と蕃漢対照東洋地図の比較

第六節 世界の四主説（四天子説）

は じ め に

中国史上の黄金時代ともいうべき唐代に、魅惑的な女性の代表として唐詩に謳われた「胡姬」とは、一体何者であろうか。いまだにそれをペルシア女性であるとかイラン系女性、稀には北方遊牧民出身の女性であるとする誤解ないし不完全な説明が、巷間のみならず学界にさえまかり通っている。確かにこれまでの常識として、漢代から南北朝時代までは匈奴をはじめとする五胡に代表される中国北方草原の騎馬遊牧民を指すことの多かった「胡」という単語が、徐々に西域の農耕都市民を中心とする異民族を指すようになり、隋唐時代には後者の用法が前者を凌駕するに至ったことはよく知られている。そして後者の代表としてしばしばペルシア人・ソグド人やトルキスタンの諸オアシス都市国家の出身者、さらにインド人までもが挙げられる。もちろん唐代にも前者の古い用法は生き残っていた。このように唐代における「胡」は、近現代日本の「外人」が「白人」「欧米人」「アメリカ人」「外国人」などさまざまなニュアンスをもって使われたのと同様に、多義であった。しかしこのような常識のままでは「胡姬」とはいったい何者なのか、具体的な姿が浮かび上がってこない。

私は最近著『シルクロードと唐帝国』[森安 2007] を執筆した際、石田幹之助の名著『長安の春』を活用し、特に第四章で取り上げた「胡姫」については多くをそれに負っている。しかしながら大きな違いもある。それは、第一に「胡姫」とは「ソグド人の若い女性」であると断言したこと、第二にその胡姫の供給源を明らかにしたことである。ただ第一点の論証は、拙著では紙数の制限により省かざるをえなかった。そこで本稿では、唐代の「胡姫」とは「ソグド人の若い女性」であると論証することを第一の目的とする。そのために、先ず、唐代において「胡はソグドである」ことを実証する史料を、既知・未知のものを交えて網羅的に紹介する。

ところで、戦後日本の歴史学は「東アジアの中の日本」という観点を共有して豊かな歴史像を描き出してきた。それは当然ながら評価すべき点であるが、日本が重要な舞台となる「東アジア史」を作り上げるという方向で、東方に偏った唐王朝像を強調しすぎたように感じられる。私は『シルクロードと唐帝国』において、このような「東アジアの唐王朝」という見方に対するアンチテーゼとして、本来あるべき「ユーラシア大陸の唐王朝」像を復元すべきことを提唱し、その描写を試みた。本稿は拙著で論じきれなかったところを補うものである。すなわち、本稿の第二の目的は、唐代の知識人が、アジアを中心とするユーラシア世界の地理をどのように認識していたかを追究して、唐がユーラシア大陸東部の帝国であり、陸のシルクロードを通じた中央ユーラシアとの関係が最重要であったという拙著の主張を補強し、同時に「東アジアの中の日本」という枠を越えて「ユーラシア世界と日本」という方向にまで視野を広げていくための材料を提供することである。

## 第一節 インド語漢語対訳字書

玄奘がインドへ求法の旅をした初唐以降、インドと中国との文化的交流は飛躍的に増大した。当時の仏教は単なる宗教というより、ある意味で学問の体系であり、仏教文献は最先端の知識の宝庫でもあった。そうした仏教文献は梵語で書かれていたため、それを学ぶことが必須になった。唐代にいくつもの梵漢

辞典が出現したのは、当然と思われる。

このような梵漢辞典すなわちインド語漢語対訳字書の類は、戦乱の続いた中国本土ではいつしか散佚してしまった。ところが人類文化史にとってまことに幸いなことに、各種の梵漢辞典のうちでも貴重な、インド語部分が悉曇文字（梵字、プラーフミー文字）で表記されているものがいくつも日本に残っていたのである。そのなかでもとりわけ注目されるのが、悉曇文字に加えて片仮名表記まである『梵語雑名』と『梵語千字文』、さらに後者の付録となっていた『梵唐消息』である<sup>(1)</sup>。

『梵語雑名』の編者は、西域のクチャ（亀茲）出身の人物で多数の言語に習熟していた利言である。彼はクチャにやって来たインド人の学僧・法月（原語名は達磨戦涅槃 Dharmacandra）のもとで仏教を学び、真月という法名を持っている。730年もしくは736／737年に師匠の法月が、時の安西節度使・呂休林（正しくは呂休琳で、恐らくは呂休環の実弟か族弟）の推薦を受けて入朝することになったのに伴い、中国本土にやって来て、持参したインド語医薬書や仏典の漢訳に従事した。741年に師匠がインドに帰国するのに従って西域を旅するが、南パミール地方に進出して唐と対峙していたチベット（吐蕃）勢力に阻まれてパミールを越えることができなかったらしく、やむなくコータン（于闐）に引き返した。不運にも法月はコータンで743（天宝二）年に入寂したので、安西節度副使・夫蒙靈督のはからいで葬儀を行ない、記念の仏塔を建てた後、利言は故郷であるクチャに戻った。

その後、利言は、754（天宝一三）年に再び中国本土の河西（甘粛西北部）に向かうことになったが、すでに彼は唐が西域支配のために置いた安西四鎮の本拠地であるクチャでも名声を得ていたらしく、時の安西節度使・封常清が駅伝馬を発給してくれた。当時、涼州（武威）では河西節度使・哥舒翰に招かれた密教僧の不空が訳経事業に従事しており、それを助けるために召喚されたので

(1) これら三種はもともと平安時代に唐から日本に将来されたのであるが、その後、筆写を重ねて伝えられ、江戸時代には木版印刷もされ、最終的には『大正新脩大藏經』（第五四巻、事象部下、二一三五番並びに二一三三番）に活字印刷して採録された。

ある。それからの彼は不空の片腕として、755年11月に勃発した安史の乱鎮圧のための法会や訳経などに活躍した<sup>(2)</sup>。利言が『梵語雑名』を編んだ時の肩書きは、長安の光宅寺に止宿する翻経大徳で、且つ朝廷に仕える翰林待詔となっており<sup>(3)</sup>、安史の乱は終わっているから、その成立は763年以降の8世紀後半と断定してよい。

もう一方の『梵語千字文』の編纂者は義浄と言われており、古くはそれを疑う向きもあったが、江戸時代における梵語学復興史の解明に情熱を燃やした高楠順次郎の考証により、もはや疑う必要はない[高楠 1914]。そうであれば、『梵語千字文』は彼がインドから帰国した695年から卒年である715年の間に成立したにちががなく、『梵語雑名』より半世紀ほど先行する。

いずれにせよこれらの梵漢辞典は、当時の中国本土に流布していたもので、9世紀に我が国の慈覚大師・円仁によって唐より将来されることになった。円仁には唐より持ち帰った書物の目録『入唐新求聖教目録』があり、そこに多数の梵漢対訳仏典と共に「梵語雑名一卷」や「翻梵語十卷」が著録されている<sup>(4)</sup>。

## 第二節 『梵語雑名』の「胡」

ここで重要なのは、『梵語雑名』では「胡」を漢字で「蘇哩」、インドの悉曇文字で *Sulī*、日本の片仮名で「ソリ」と説明している事実であり、『梵唐消息』でも漢字が「孫隣」であるほかは同様である。この「蘇哩 = *Sulī* = ソ

(2) 以上の利言に関する話の大筋は、唐代に編まれた翻訳仏典目録にして翻訳者列伝ともいべき円照『貞元新定釈教目録』の、巻一五にある法月や不空の略伝と、そこに関連記事を発見した先学の業績によっている。その先学とは、1916年の『仏書研究』22号に投稿した氏名不詳の日本人と、明治時代に日本にやってきたフランス人東洋学者レヴィが持ち帰った江戸版本の梵漢辞書を、パリで出版して欧米学界に紹介したインド人学者バグチである。

(3) 788年の紀年をもつ仏典奥書でも利言はほぼ同じ肩書きで現れる。Cf. 池田 1990, p. 314.

(4) ちなみに、『梵語千字文』を将来したのは円仁だけでなく、862年に高岳親王(真如親王)に随って入唐し、天台山・五台山・長安・洛陽を巡って865年に帰国した宗叡もその一人である。彼の『新書写請来法門等目録』には本書に対して「梵漢両字一卷(字は一千餘に及ぶ、義浄三蔵の述)十張」という記載がある。

り」＝「孫隣」が、玄奘の伝える「<sup>そつり</sup>率利」、義浄の伝える「速利」、さらに時代を遡って『大智度論』巻二五に見える「修利」と語源を同じくするものであること<sup>(5)</sup>、さらにその語源がソグド語のスグディーク (Suydīk) 「ソグド (より正確にはソグドという地名の形容詞形で、その意味はソグディアナの出身者、ソグド語を話す者)」であることについては、学界に異論はない<sup>(6)</sup>。もちろんこの Suydīk の直接の漢字音写が『後漢書』西域伝・『晋書』西戎伝の「栗弋」、『魏書』西域伝・『周書』異域伝の「粟特」とみなされるが<sup>(7)</sup>、「蘇哩」「孫隣」「率利」「速利」「修利」については、その梵語形 Śūlika- (大谷勝真説)あるいはコータン語形 Sūli (熊本裕説)を介しての漢字音写と考えられる<sup>(8)</sup>。

一方、スグディーク (Suydīk) は、突厥・ウイグルの古代トルコ語碑文ではスグダク (Suydaq) として現れる。しかも、突厥碑文では黄河大屈曲部内のオルドス地方にいたソグド人集団の「六州胡」をアルティ＝チュヴ＝スグダク (Altı čuv Suydaq) と翻訳しており、アルティは「六」を意味し、チュヴは「州」の音写であるから、ここからも「胡＝ソグド (人)」という等式が得られる<sup>(9)</sup>。

以上のように『梵語雜名』で明らかにソグドを意味することが論証された

(5) 『大唐西域記』巻一では、「率利総記」として西部天山の北麓セミレチエ地方からトランスオクシアナに及ぶ諸都市国家を、明らかにソグド人の領域とみなす説明を与えている [cf. 水谷 1971, p. 20]。一方、義浄の『南海寄帰内法伝』や『大唐西域求法高僧伝』では、速利はインド北方の胡 (諸胡・胡人・胡疆) で、カシミールより向こう側におり、靺鞨・吐蕃・突厥と並称される存在である [宮林／加藤 2004, pp. 88, 123, 136-137]。さらに古い『大智度論』には兜呾羅 (小月氏)・安息・大秦と並んで「修利」が現れる [cf. 大谷 1913, pp. 1428, 1563-1564]。

(6) Cf. 大谷 1913, pp. 1428, 1563-1569; 水谷 1971, p. 20; 熊本 1985, pp. 9-10, 16-17.

(7) Cf. 大谷 1913, pp. 1577-1579; 白鳥 1924, pp. 61-68. ただし現行『後漢書』の原文に「栗弋」とあるのは、「栗弋」の転訛。

(8) 大谷 1913, pp. 1568-1569; 熊本 1985, p. 17. ただし、コータン語の Sūli が、常に厳密に「ソグド人」を意味するわけではない。単に「(貿易) 商人」の意味になる場合もあるという [cf. 熊本 1985, p. 12]。これはあたかも古代漢語で交易に従事する「商 (= 殷) の国の人、すなわち「商人」が「あきんど」の意味に転化したのと同じ現象である。

(9) この比定はロシアのクリャシュトルヌイによってなされたものであるが、護 1967, pp. 569-572 を参照するのが便利である。

「胡」は、実は「天竺」「波斯」「突厥」の後ろで、「罽賓」「吐火（羅）」「龜茲」「于闐」「吐蕃」の前に配列されている。この事実もまた「胡」が中国の西方～北方の諸民族一般を指す普通名詞ではなく、具体的に「ソグド」を意味する固有名詞であったことを裏付けている。「胡」が「吐火（羅）＝覩佉羅＝Tukhara」すなわちトハリスタン（旧バクトリア）とさえ区別されていることに注意したい<sup>(10)</sup>。

ソグド人と密接な関係を持った不空が翻訳したことになっている『宿曜経』には、マニ教とのつながりが強い七曜日の「胡名」が、「波斯名」「天竺名」と並んで列挙されている。吉田豊によれば、その「胡名」が西イラン語（中世ペルシア語ないしバルティア語）からソグド語に借用されて定着した形、即ちソグド語形であることが、既にヘニングによって証明されているという<sup>(11)</sup>。とすれば、ここでも「胡＝ソグド（語）」の等式は成り立っている。

当時はいろいろなレベルの梵漢辞典があったようであるが、『梵語雑名』はそれほど高水準のものではない。採録された単語を系統的に分類したバグチが指摘したように、この辞典を駆使したところで仏典翻訳など望むべくもなく、せいぜい旅行者や商人が旅行や商売などに使える程度である [Bagchi 1937, pp. 355-357]。旅行や商売が目的であるならば、むしろ当時のユーラシア東部の代表的国際語であったソグド語を学ぶ方が手取り早く、ソグド語漢語辞典こそが多数残ってもよさそうなものである。しかし、現存史料の在り方は、そうはならなかったことを示唆している。それはなぜなのか。

中国本土の漢語諸方言を話した人々はもとより、朝鮮・渤海・日本・安南などを包含する東アジア文化圏の人々は、あくまで漢文を共通の文章語としており、しかも彼らの間には仏教が最も広汎に浸透しつつあった。つまり東アジア第一の国際語は漢語であり、東アジアの宗教としては仏教が優位を確立していた。

このような漢字文化圏から西域・南海・インドに行こうとする者の大半は、

(10) これは『南海寄帰内法伝』や『大唐西域求法高僧伝』で速利を覩佉羅と区別し、『大智度論』で修利を兜佉羅と区別していた事実とも符合する。Cf. 大谷 1913, pp. 1428, 1449, 1563-1564; 宮林／加藤 2004, p. 88.

(11) Cf. 吉田 1994, n. 89 in pp. 300-299 (逆頁).

仏僧ないしは仏教徒であったにちがいない。しかも唐代までは、インドはもちろん、パミール以東の西域も南海もまだイスラム教に席卷されるにはほど遠く、いわばゆるやかな仏教文化圏であって、インド語さえできれば旅行も商売もなんとかなったはずである。ならば彼らが漢語以外に旅行用にもう一つの言語を習得しようとする時、選ばれたのがインド語であって、ソグド語でなかったことは十分肯けるのである。

もっとも、平安時代の藤原佐世『日本国見在書目録』には『波斯国字様』一卷・『突厥語』一卷と並んで『翻胡語』七巻が記載されているから、巻数から判断してもソグド語がペルシア語・突厥語（古トルコ語）以上に重要な勉強の対象になっていた可能性はある。唐が多言語・多民族社会であったことを忘れてはならない。

さて日本で再発見された『梵語雑名』を欧米の学界に紹介したバグチの研究によって、インド語を音写するために『梵語雑名』で使われている漢字のシステムが8世紀後半に大活躍する密教僧・不空の用いたシステムによく似ており、義浄時代のそれには遜らないと結論されている [Bagchi 1937, p. 416]。それゆえ、『梵語雑名』の成立は8世紀後半としてよい。しかし、その中に含まれる情報の多くはむしろ彼自身が西域にいた8世紀前半に収集されたとみる方が自然である。そしてそのことを傍証する最大の根拠として、『梵語雑名』には未だ廻紇（ウイグル）も大食（タジク）も現れていない事実が指摘される。8世紀中葉～9世紀の中央ユーラシア情勢を伝える文献に、この両者が現れないことはおよそ考えられないからである。

### 第三節 蕃漢対照東洋地図

平安時代の日本において、唐・ウイグル・チベット・天竺・タジクを含む東洋世界全体の地図が知られていたと聞けば、誰しも少なからず驚くにちがいない。しかも地図中の国名が漢字とチベット文字の両方で書かれていたと知れば、その驚きは倍加しよう。

実際にそのような地図が存在したことは、鎌倉時代に近江国園城寺（三井



寺)の別当(管長)となった禅覚によって書写された文書から知ることができる。禅覚は9世紀に唐からもたらされた原本ではなく、それまでに何度か転写されたものをもう一度書き写したらしい。京都大学の松本文三郎が旧蔵していたその鎌倉写本の一つが、大正時代に東京大学の高楠順次郎に貸出中、かの関東大震災に遭遇して焼失してしまったことは、惜しんでもあまりある。ただ幸いなことに、これに基づいて明治・大正期に研究用に作った新写本が少なくとも二部以上あったらしく、寺本婉雅はその一つの写真を学界に初めて紹介してくれた[寺本 1931]。一方、昭和16年に(財)東洋文庫で開催された第28回大蔵会の折りに、松田源一郎所蔵にかかる同種写本が展観され、これを第二次大戦後に壬生台舜が紹介した[壬生 1963]。

寺本・壬生両氏の研究を総合すれば、その原本は9世紀に入唐した弘法大師・空海か智証大師・円珍のいずれかが彼の地より将来した可能性が高い。初めに「蓮華台藏世界」と題した仏教的宇宙の図が漢字の説明入りで描かれ、次にチベット文字の陀羅尼があり<sup>12)</sup>、最後に本節の主題である蕃漢対照東洋地図がある。地図といっても各国の領域は四角い囲み線で示され、その中に漢字とチベット文字で国名が記入されただけの簡単なものである。寺本はこれを「吐蕃対照西域地図」と名付けているが、西域だけでなく中国・インド周辺を含み、さらに中央ユーラシア東部の草原地帯にも及んでいるので、西域地図というよりむしろ東洋地図というべきである。しかも、写本全体の冒頭に仏教的宇宙が描かれていることに鑑みれば、当時の世界地図とみなしてもよからう。少なくともインド・唐・チベットそして我が日本を含む仏教世界から見た全世界である。

さて10頁～11頁には、寺本論文の口絵にある明治写本の写真(図1)に対応させて、おそらく寺本自身が描いたと思われるスケッチ(図2)を並べて転載する。ただしこのスケッチではチベット文字は省略されている。

現在、我々が見ることができるのは、空海ないし円珍の将来した原本から幾

(12) これは『大正新脩大蔵經』第二一卷、密教部四、一二二七番「大威力烏枢瑟摩明王經」*Mahābalavajrakrodhasūtra* からの引用である。

度となく複写されてきた写本にすぎない。明治以前の日本に正しくチベット文字を読める人は皆無に近かったはずで、筆写が繰り返される毎にチベット文字の原型は崩れていき、現代にまで伝存した状態ではとても読めない個所が多くなっている。以下には問題となる漢字の国名を、スケッチの番号と対照できる形で列挙し、必要場合はチベット文字の読み方にも言及しつつ解説する。

1. **拔漢那**=拔汗那・跋賀那・鋌汗とも書かれるフェルガーナ（『史記』では大宛）である。パミール北部の農牧接壤地帯を形成する大盆地であり、ソグディアナの東方に当たる。
2. **薩賓**=正しくは罽賓とあるべきものの誤写である。罽賓は、時代と文献の性格によって指すところを変えるが、唐代一般にはカーピシー～カーブル地方を指すはずである。Cf. 桑山（編）1992, pp. 115-119.
3. **大石**=漢字では一般に大食／大寔と書かれるタジクである。これがイスラム勢力（8世紀前半まではウマイヤ朝；後半からはアッバース朝）を指すことは疑いない。Cf. 桑山（編）1992, pp. 41-42, 156.
4. **大突厥**=まずはモンゴル高原に本拠を置いた突厥第二帝国と考えるべきである。しかし、寺本がチベット文字部分を Taḥa Thor-kus と読むうちの Thor-kus は、かなり難しいが、当たっているかもしれない。もしそれが正しければ、突厥第二帝国ではなく、天山山脈北麓によった旧西突厥の後裔たるトゥルギシュ（突騎施）とみなすこともできよう。
5. **拂林**=チベット文字は寺本が Pu-lim と読む通りであり、それは当時の「拂林」の中古音 \*p' juət-liəm に対応する。拂林／拂菻はイラン系の言語でローマを指すフロム（Frōm / Hrōm）に対して使われた漢字表記である。5世紀以降のローマとは、東ローマ帝国（ビザンツ帝国）のことである。この比定は白鳥庫吉が最初に提示し、後にペリオがそれを採用した。欧米の学界ではこれはペリオのオリジナルのように思われているが、実際はそうではなく<sup>(13)</sup>、しかも白鳥はその後も考察を続け、自説を大幅に増補・訂正

(13) 白鳥 1904; Pelliot 1914; 白鳥 1931-44, pp. 424-426; 榎 1944, pp. 210-211.

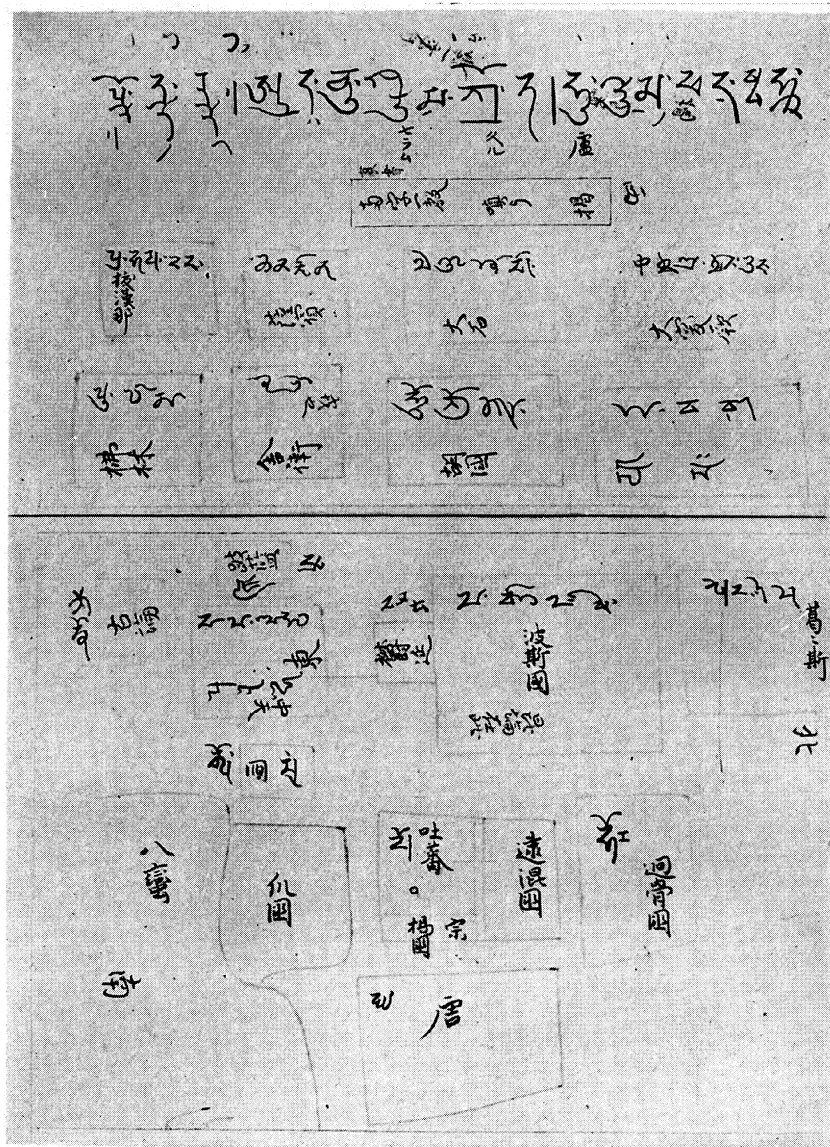


図1 寺本 1931 年論文の口絵より転載

## 吐漢對照西域地圖（原圖縮寫）

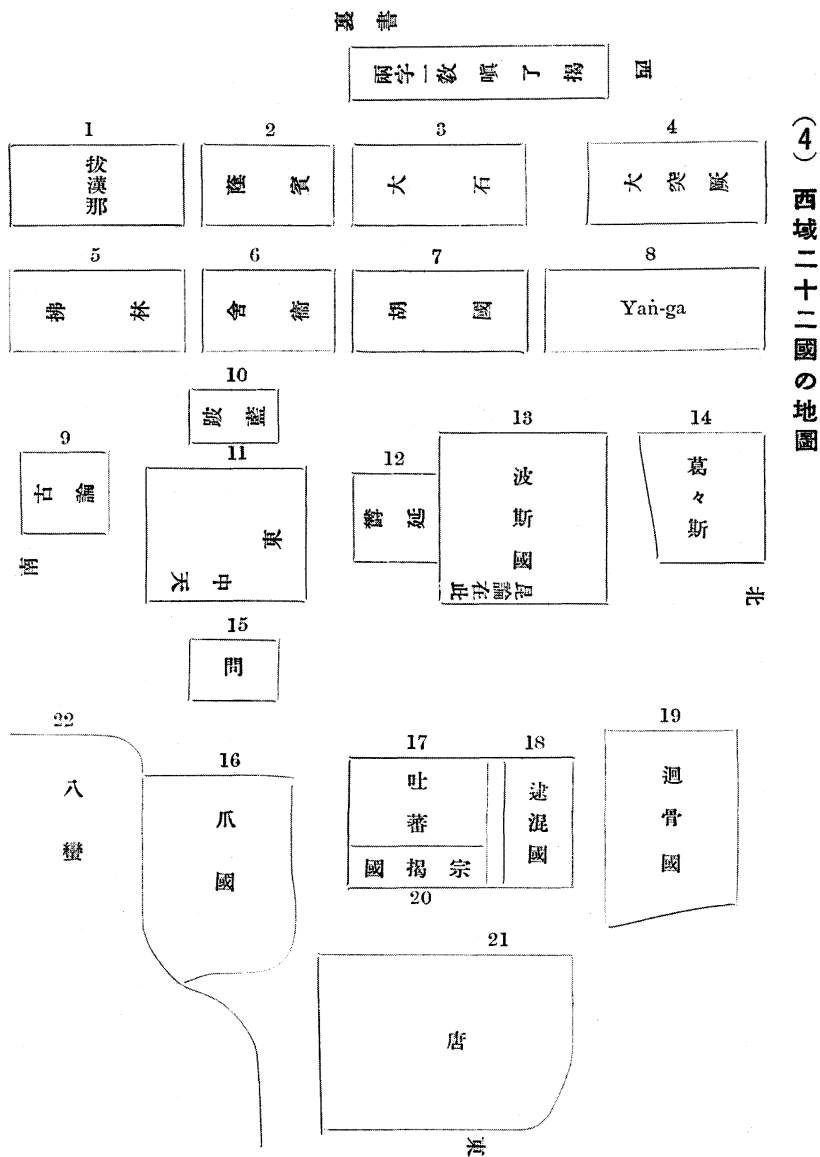


図2 寺本1931年論文, p.76より転載

したのである〔白鳥 1931-44〕。榎一雄は白鳥説を祖述すると共に、さらに補説を加えている。白鳥・榎によれば、唐代の拂林／拂菻には次のようないくつかの用法がある<sup>(14)</sup>：①東ローマの東方領土であったシリア・パレスチナ地方（主邑はアンチオキア）、②小アジア以西の東ローマ帝国（首都コンスタンチノーブル）、③イスラム勃興後もクテシフォン（ササン朝の首都）に教主カトリコス＝パトリアク Catholicos Patriarch のいる本山があり、タジク内部で信教の自由を得ていたネストリウス派キリスト教徒集団、いわば景教世界、④ササン朝発祥の地であり、その最後の皇帝となったヤズディギルド三世が即位前に身を潜めていたファールス州のイスタフル Istaxr、⑤トハリスタンの主邑バルフの東方二日行程にあるフルム（忽懷，Khulm）。

①は前代にひき続いて初唐に見られた一般的な用法であったが、7世紀中葉にシリア・パレスチナ地方がアラブのイスラム勢力、即ちタジクの手に落ちた後、8世紀前半の盛唐では②の用法が現れる。③～⑤はやや特殊な用法である。本地図の拂林については、最初私も単純に東ローマでよいと考えていたが、①②はいずれも漢語世界から見て極西にある国を指したはずであり、そうであれば本地図上の位置が不自然である。そこで現在の私はこれを⑤に比定する選択肢も残しておきたいと考えている。その理由は下記13番の波斯国の項で述べることにする。

6. 舍衛＝祇園精舎のあったインドの舍衛国と思われる。しかし、数あるインド諸国のうち本地図に記載があるのは11番の中天とこの舍衛だけであり、しかも両者の位置は離れている。さらにここには「戎也」という注記もある。

7. 胡国＝チベット文字部分を寺本は Kuo-kuo と読み、「活国」すなわちエフタル民族の国に当てようとするが、誤り。正しくは Huo-kuog と読むべきである<sup>(15)</sup>。当時の「胡国」の中古音は \*ɣuo-kwək であり、Huo-kuog はそ

(14) 白鳥 1931-44, pp. 424-427, 533-535, 538-539, 561, 589-591; 榎 1942, pp. 196-197, 203-205; 榎 1944, pp. 210-215, 222, 224-225, 237-238.

(15) 以前の拙稿〔森安 1977, p. 41, note 169〕では Hwo-kog と解説したが、ここで改める。

れをかなり厳密に反映しているとみてよい。

9. **古論**=寺本がチベット文字部分を Ko-ron と読むのは正しいが、これを『大唐西域記』に親貨邏国の旧領として見える屈浪拏に当てるのは全くの見当はずれである。私は最初、これをインド南端部西岸にあり、東南アジアと西アジアを結ぶ海上ルートの要衝として栄えた俱藍・故臨、すなわちキーロン（Quilon）かと考えたが、同僚の桃木至朗のアドヴァイスにより、今は南海の崑崙／骨崙＝古龍とみる方に傾いている。松田壽男は崑崙を、コーチシナ・カンボジア・シャム・ビルマ南部・マレー半島に亘り、中国で崑崙奴として珍重された巻髪黒身の民が住んでいた地域の総称とみなしている [松田 1941, pp. 259, 270]。ただし『南海寄帰内法伝』によれば、義浄は骨崙国で水時計の制度を実見し、「骨崙や速利（ソグド文化圏）ですらも仏典をサンスクリット原文で読んでいる」 [宮林／加藤 2004, pp. 312, 343] と伝えているから、その骨崙は義浄が長く滞在したスマトラ島である可能性が高いように思われる<sup>16</sup>。

11. **中天**=中天竺＝中インド。同じ枠内に「東」とあるのは、東天の略ではなく、本来は本図全体の東になる21番の唐のあたりに書かれるべきものを誤って転写したのであろう。
12. **鬱延**=寺本はフェルガーナかと疑うが、それはすでに1番に登場しており、むしろ西北インドのウディヤーナ（普通の漢字音写は烏仗那・烏長）と見る方がよい。
13. **波斯国**=チベット文字を寺本が Pa-sing-go と読むうち確かなのは冒頭の Pa- だけ。波斯が Pārs の音写でペルシアに当たり、本来の波斯国がササン朝ペルシアを指すことは周知の通りである。しかしササン朝は既に7世紀中葉に3番のタジクに滅ぼされてしまったのであるから、ここに現れるのは奇妙である。しかも本地図上ではこの波斯国を示す枠の中に「昆論は此に在り」という注記がある。この昆論は容易に崑崙に同定されるが、その

<sup>16</sup> 慧超『往五天竺国伝』によれば、崑崙国は金産地を控えていたはずだから、その点でもスマトラ島が有利であろう。Cf. 松田 1941, p. 256; 桑山（編）1992, pp. 42, 155.

崑崙は『史記』大宛伝の記事に代表される如く、中国では古くから西王母伝説と結び付く一方、黄河の源流であり、玉の産地と考えられてきた<sup>(17)</sup>。現代のクンルン山脈は東は青海省から西はコータン・カシュガル<sup>ウイグル</sup>の南方にまで及んでいるが、本地図の昆論はさらに西方のパミール～ヒンドゥークシュ山脈地方を指しているとみてよからう。なぜなら『梵語雑名』には「于闐=矯喋多囊<sup>クワリタナ</sup>」と「烏長=烏你也囊<sup>ウジヤナ</sup>」との間に「崑崙=你波多羅<sup>ジバタラ</sup>」という記載がある一方、『大唐西域記』には覩貨邏国の旧領の一つである「呾摩咀羅<sup>ヒマタラ</sup>」が「唐言で雪山の下」という意味であると明記されているからである<sup>(18)</sup>。昆論=崑崙=崑崙が音通であることに疑問の余地はないが、エフタルの夏営地があったとされる呾摩咀羅も多分『梵語雑名』の你波多羅と同じ原語の転訛形ないし異形音写ではなかろうか。そう考えて私は本地図の波斯国を、雪山すなわちヒンドゥークシュの山懷に抱かれたトハリスタン（旧バクトリア）の一部ないしその東方近辺を指しているとみたい。

そうであれば、その波斯国の実態は何であろうか。第一の候補は、ヤズディギルド三世とその子ペーローズ（卑路斯）がトハリスタンの方へ東走して建てようとしたササン朝亡命政権である。ヤズディギルド三世は途中で落命したが、子ペーローズは661年、唐王朝から波斯都督に任命された。波斯都督府が置かれた疾婁城がどこかいまだ定説はないが、波斯都督府はまもなくタジクの手に落ちたため、ペーローズは恐らくトハリスタンに逃げて吐火羅葉護の保護を受け、その後、670年代に唐朝に亡命する。彼は長安で死去したが、その子ナルセス（泥涅師）は唐の西域政策に翻弄されながらもトハリスタンに戻り<sup>(19)</sup>、そこに少なくとも8世紀初頭までは勢力を維持したようである。両唐書・波斯伝には、8世紀中葉まで引き続き波斯国から朝貢使が来朝したことが記録されているだけでなく、イスラム史料によれば729年の時点でもトゥルギシュ可汗・蘇祿の軍中にヤズディギ

(17) Cf. 白鳥 1931, pp. 248-249; 白鳥 1970, pp. 586-593.

(18) 『大唐西域記』卷三・六・五ならびに卷十二・一一；水谷真成訳注本, pp. 130, 375-377; 桑山正進本, pp. 116, 270-271.

(19) 以上の概要については, cf. 榎 1944, pp. 230-234; 前嶋 1958-59, pp. 139-146.

ルド三世の孫のホスローがいたというから<sup>20)</sup>、ササン朝亡命政権の残党は8世紀中葉くらいまでは余燼を保ったと思われる。第二の候補は、ネストリウス派キリスト教徒集団である。イスラム勃興後も信教の自由を確保していた彼らの本山はクテシフォンにあったが、その東方の大司教区がホラーサーン～トハリスタンにあった蓋然性は歴史的に見て決して低くない。さらにそれは、吉田豊が明らかにしたように〔吉田 1994, p. 299〕、不空訳『宿曜経』に見える七曜日の「波斯名」が、実は「キリスト教徒が使う曜日の名前」であったことから、窺えるのである。

ところで唐の西域経営が最高潮に達したのは、西トルキスタン～アフガニスタン北部（トハリスタンを含む）に16の都督府とそれに属する多数の州県が置かれた661年からしばらくの間である。唐王朝はこれを記念するために西域図志の編纂と、吐火羅（トハリスタン）に記念碑を建てるという二つの事業を行なった。榎一雄によれば<sup>21)</sup>、この時に唐の勢力圏の最西端に記念碑を建てるために派遣された人物が、羽田亨の史料紹介によって有名になった「波斯国大酋長阿羅憾丘銘」という墓誌銘の主人公である。吐火羅立碑のことは一般には吐火羅道置州県使・王名遠に帰せられるが、実は阿羅憾が深く関わっていたとみなしたわけである。そして彼が「拂林国諸蕃招慰大使として派遣され、拂林の西堺に碑を立てた」というまさにその拂林こそは、上記5番の拂林の項で紹介した⑤トハリスタンの主邑バルフの東方二日行程にあるフルム（忽慄）であろうという。榎は、道宣の『釈迦方志』に忽慄は一本に拂林に作るという注記があることも指摘している。阿羅憾はおそらく、波斯都督府すなわちササン朝亡命政権か、あるいはホラーサーン～トハリスタンにあったキリスト教徒集団に関わる重要人物であったと思われる。いずれにせよその墓誌銘にいう拂林には、当然ながら東ローマ帝国が含意されていたことであろう。極西の大国としての位置は新興の大石（本地図の3番）に取って代わられているが、本地図作製

<sup>20)</sup> Cf. 前嶋 1958-59, pp. 165, 196-197; Beckwith 1987, p. 109.

<sup>21)</sup> 榎 1944, pp. 225-226, 234-238.



者にとっても唐初からよく知られた拂林の名を脱落させるわけにはいかなかったために、660年代の唐の西域経営絶頂期の記憶ないし記録を基に、阿羅憾墓誌銘と同じような操作を行ない、実際に唐の勢力圏の最西端にあったフルムと、タジク西方のフロム（東ローマ）とが敢えて混同されるようにし向けたのではなかろうか。

因みに慧超『往五天竺国伝』にも波斯国の条があるが、そこでは8世紀初めの段階で既に大寔（タジク）に併呑されていたことを正しく伝えている<sup>22)</sup>。一方、榎によれば、日本においては9世紀以降も相変わらず波斯が極西の国として認識され<sup>23)</sup>、それが拂林や大石に取って代わられることはなかったようであるから、本地図が平安後期の日本国内に流布したわけではなかったらしい。

14. 葛々斯＝これは漢字で黠戛斯<sup>かつかつし</sup>とも表記されるキルギスである。寺本がチベット文字を Ped-she-lā と読むのは誤りで、正しくは Hir-kis（ヒルクス）もしくは Gir-kis（ギルクス）と復元すべきである。その根拠は唐代の敦煌出土チベット語文書 Pelliot tibétain 1283 などにある<sup>24)</sup>。
15. 問＝おそらくチベット語で南方にいる異民族のモン人を指し、チベット文字表記も Mon-ba（モンバ＝モン人）と復元できるかもしれない。インドシナ半島に分布したモン＝クメール族の構成要素であるモン族と同値かどうかはとにかく、無関係ではあり得ない。
16. 爪国＝寺本は爪を瓜と読み替え、河西の瓜州とみるが、それはありえない。私はこれを爪哇国<sup>そうわ</sup>すなわちジャワと考えたい。現在知られている漢籍に爪哇という表記が見えるのはずっと後の元代からであるが、ジャワは唐代以前から閩婆ないし社婆という形で現れている。松田壽男によれば、当時の閩婆というのは、ジャワ・スマトラ両島を包括した所謂ヤヴァ＝ドヴィーパのことである [松田 1941, p. 257]。

<sup>22)</sup> Cf. 桑山（編）1992, pp. 41-42, 155-156.

<sup>23)</sup> Enoki 1981, pp. 104-105. この榎の指摘は、日本に伝来した四主説に関する海野 1956, pp. 24-25 の記述によっても確認できる。

<sup>24)</sup> Cf. 森安 1977, pp. 5, 6, 21, 28.

17. **吐蕃**＝チベット文字表記は Po (ポ) である。いうまでもなくチベットを指す。次節に取り上げる蕃漢字書断章にもあるように、チベット語ではチベットを Bod と書くが、その発音は早くからボッドではなくポとかブに近かったようで、ここではその発音を表記していると考えて間違いない。
18. **逮混国**＝逮混は普通には吐谷渾と書かれる鮮卑系<sup>(25)</sup>の民族であるが、次節の蕃漢字書断章のような敦煌文書には退渾という表記もある。チベット語ではアシャ (‘A-zha) というが、ここにはチベット文字表記が見あたらない。元来は中国本土とチベットとの中間にあたる現在の青海省に建国していた独立国家であったが、7～9世紀に吐蕃・唐の係争の地となった。それが本地図に現れるのは、8世紀中葉の Pelliot tibétain 1283 により唐帝国内における突厥国の存在が知られた [森安 2007, pp. 319, 328-331] のと同じように、衝撃的である。
19. **廻骨国**＝チベット文字表記は Hor (ホル) である。既に私が詳しく論じた [森安 1977] ように、ホルは、ある条件を満たす場合には、明らかにウイグルを指すのであるが、ここはその場合である。ウイグルは漢字表記では廻紇ないし回鶻であるが、ホルは決して紇や鶻の直接音写ではなく、チベットから見て北方にいる漢民族以外の有力異民族を指すチベット語なのである。本文書には、漢字の国名・民族名を単純にチベット文字で音写する場合 (上記の5番と7番) と、チベット語を表記する場合 (14番や17番) とが混在しており、ここは後者の例である。
20. **宗掲国**＝宗哥とも書かれる青海東部のツォンカである。すでに7～8世紀のチベット文吐蕃編年紀 (敦煌出土) に Tson-ka として現れる。
21. **唐**＝寺本はチベット文字を「唐」に対応する中古音とみて Thang (タン) と読むが、私はむしろここには、チベット語で唐帝国を指す rGya (ギャ) と書いてあったのではないかと思う。
22. **八蛮**＝一般には「四夷八蛮・九夷八蛮」などと熟して中国周辺の夷狄を

(25) 私は鮮卑を基本的にはモンゴル系と考えているが、吐谷渾は純粋なモンゴル系ではなく、チベット系の要素が混じっていると思う。Cf. 森安 1977, p. 21, & footnote 76.

総称する言葉であるが、『貞元新定釈教目録』巻一七に、「皇帝の威は北狄に加わり、澤は東夷を被い、南は八蛮に及び、西は天竺に泊ぶ」とあるように、中国から見て南方の異民族だけをいう場合もあるから、ここはおそらく東南アジア～南アジアのある領域を漠然と指しているのであろう。鑑真が日本に来る前の船で遭難して広東に流された時、婆羅門（インド）・師子国（スリランカ）・波斯・大石・白蛮・赤蛮などからやって来た船を見たと伝えるのも、参考になろう。

ここで蕃漢対照東洋地図の年代を考察したい。これは 21 番の記載により明らかな通り唐代のものであるから上限は 7 世紀であり、9 世紀の前半か中葉に日本にもたらされたのであるから、その下限は 9 世紀中葉である。さらに北方草原地帯の代表としてウイグルがおり、しかもその表記が古い方の廻紇ではなく、8 世紀末にウイグル自身の請願（実際は強要）によって替えられた新しい表記である廻鶻・回鶻を省略した形の廻骨になっていることから、これを 8 世紀末～9 世紀中葉のものと限定することができる。キルギスが葛々斯という形で現れているのも、この推定を支持する。ただし、実際には地図に見える大突厥は 740 年代にウイグルに取って代わられているのであるから、この地図にはやや古い情報も混在しているとみなさねばならない。

そういう条件をすべて飲みこんだ上で、もう一度、蕃漢対照東洋地図のスケッチを御覧いただきたい。地図学の発達していない当時のことであるから、相互の位置関係には誤りも多く、地図としての信頼性は低いのであるが、私は次の事実に着目する。すなわち、そこに厳然として存在する 7 番の胡国は、突厥・キルギス・ウイグルなどの拠った中央ユーラシア草原地帯よりは南で、西北インドよりは北にあり、チベットよりは西で、しかもペルシアやタジクに近いところに独立していた国家ないし民族集団でなければならない。これはもう、時代的にも地域的にもトランスオクシアナのソグド諸国、ないしはそれを東北（タラス・セミレチエ）と東南（チャガニヤンなど）に拡大した大ソグド文化圏 [cf. 大谷 1913, p. 1452] をおいてほかに候補はないのである。

#### 第四節 『往五天竺国伝』と蕃漢字書断章

これまでの論証で、唐代の「胡国」とはまさしく「ソグド国」を指し、「胡」がソグド人（ないしソグド語を話す人）である確率が極めて高いことを納得していただけたかと思うが、ここでさらに駄目を押しておきたい。まず慧超の『往五天竺国伝』の「胡国」に関する次のような記事を挙げよう。

「大窳<sup>しよく</sup>国から東はすべて胡国である。すなわち安国・曹国・史国・石驪国・米国・康国などである。それぞれ王を有してはいるが、おしなべて大窳の管轄下にある。国の規模は小さく、軍も多くはなく自衛できない。＜中略＞言語はどの国とも異なっている。またこの六国はいずれも火祿（ゾロアスター教）を信奉しており、仏法を知らない。ただ康国のみが寺一つあり、僧が一人いる。」[cf. 桑山（編）1992, pp. 43, 162-169.]

新羅僧・慧超は、海のシルクロードでインドに入り、インドの仏教寺院や聖跡を経巡った後、陸のシルクロードで唐に戻った。彼が西北インドからパミールを越えて東トルキスタンへと旅したのは725～727年頃であり、まさしくソグド諸国家がアラブのウマイヤ朝の勢力に屈し、対抗策として突厥（第二帝国）・突騎施・唐への援軍要請を続けながらも、独立を失っていく時期のことである。アラブ軍に抵抗した「ソグド王にしてサマルカンドの領主デーワシュティータチュ」が立てこもったムグ山城が陥落したのは722年のことであった。ここに胡国として列挙された六国は、不明の石驪国を除けば、すべてトランスオクシアナに位置する典型的なソグド人オアシス都市国家である。

もちろん私にとって不利な情報も正直に出しておかなければフェアではない。慧超が、各地の人間について「胡」であると明言しているのは、ガンダーラ、バーミヤン、カシミール北東、ギルギット、トハリスタンの一部、さらには東トルキスタンの焉耆にまで及んでいる。確かにこれは「胡」の広義の用法である。しかしながら「胡国」と述べているのは、あくまでソグド地方だけなので

ある。

もう一つは、先ほどの蕃漢地図と興味深い対応をなすと思われる蕃漢字書断章である。これまた敦煌から出土し、現在はパリ国立図書館に所蔵されている漢文文書 Pelliot chinois 2762 の裏面の一部に書かれたものである。本文書の表には長文の張淮深修功德記が書かれているが、首尾共に欠けており、現存するのは4枚分だけである。裏には2枚分に漢詩が7首ほど引用されており、別の1枚にここで取り上げるチベット語と漢語の対訳字書が記されている。字書といってもわずか50語にも満たない単語を著録しているだけで、本来は大部であった字書の一部を抜粋したのか、あるいはこれで全てだったのかは不明である。字書断章と名付けるゆえんである。ここに、チベット文字の部分をローマ字に直して、関連部分を提示する。

rGya / Bod / Sog-po / 'A-zha / Dru-gu // rGya rje / Dru-gu rgyal-po

漢 特蕃 胡 退渾 廻鶻 漢天子 廻鶻王

Bod gyi btsan-po // 'A-zha rje / Lung rje //

土蕃天子 退渾王 龍王

本文書の表側にある文章の主人公である張淮深というのは、9世紀中葉に敦煌地方を本拠にして唐王朝からもチベット帝国からも独立した政権を築いた河西帰義軍節度使・張議潮の後継者であり、890年に死去しているから、その功德をたたえる記事の裏に書き付けられた蕃漢字書断章の年代は10世紀とみてほぼ誤りない。「漢」とあるのは中国王朝のことで、唐の可能性が高いが、五代諸王朝でもよく、「漢天子」も唐皇帝ないし五代の皇帝を指す。退渾は吐谷渾、龍族は焉耆出身のトカラ人のことである。吐蕃のことを特蕃とか土蕃と表記する点、廻鶻（ウイグル）のチベット語がホル（Hor）ではなくドルグ（Dru-gu）即ちトルコとなっている点は注目される。しかし、ここではなによりも漢語「胡」に対応するチベット語がソグポ（Sog-po）となっている事実こそが重要である。ソグポのポとは「～人」を意味する接尾辞であるから、「胡＝ソグ人」と説明しているわけである。10世紀といえば諸言語文書より成る敦煌文献

が最も充実している時期であり、当時の河西地方に一定程度以上の人口を有したことが敦煌文献より知られる民族集団の名称とそのチベット語もほとんど判明しているのだから、件の「ソグ」をソグドとみなすことに異議をさしはさめる者は、たとえ専門家といえどもいないはずである。

既に述べたように、『梵語雑名』においても、蕃漢対照東洋地図においても、「胡＝ソグド」という等式が証明されたが、本節で見た『往五天竺国伝』の記事と蕃漢字書断章とは、そのきわめて強力な傍証となるのである<sup>26)</sup>。

### 第五節 『梵語雑名』と蕃漢対照東洋地図の比較

ここで改めて『梵語雑名』と蕃漢対照東洋地図の類似点と相違点に着目するため、蕃漢対照東洋地図のスケッチ番号順に、『梵語雑名』に見える名称を対応させてみよう。

蕃漢対照東洋地図	『梵語雑名』
(8世紀末～9世紀中葉)	(8世紀前半)
1. 拔漢那	
2. 薩賓	罽賓 = Karpīśaya 「カーピシー」
3. 大石	
4. 大突厥	突厥 = Trusaka
5. 拂林	
6. 舍衛	舍衛 = Śrāvastī
7. 胡国 Huo-kuog	胡 = Sulī (蘇哩) 「ソグド」
8. (不明)	
9. 古論	

<sup>26)</sup> なお、7世紀に成立した玄奘の伝記『大慈恩寺三藏法師伝』が10世紀末～11世紀初頭にウイグル語訳された [cf. 森安 1985, pp. 58-60] が、そこでは原文の「胡」がウイグル語で *Surydaq* となっている。この事実は、10世紀に東部天山地方を支配していた西ウイグル王国で、漢語の「胡」がソグドを意味したことを明証する。Cf. Zieme 1992, pp. 350-351.

- |             |                      |
|-------------|----------------------|
| 10. 跋藍      |                      |
| 11. 中天      | 天竺国 = Indudeśa 「インド」 |
| 12. 鬱延      | 烏長 = Udyāna 「ウディヤーナ」 |
| 13. 波斯国     | 波斯 = Pāraśi 「ペルシア」   |
| 14. 葛々斯     |                      |
| 15. 問       |                      |
| 16. 爪国      |                      |
| 17. 吐蕃 Po   | 吐蕃 = Bhuṭa 「チベット」    |
| 18. 逮混国     |                      |
| 19. 廻骨国 Hor |                      |
| 20. 宗揭国     |                      |
| 21. 唐       | 漢国 = Cīnadeśa (支那泥舎) |
| 22. 八蛮      |                      |

両者に共通して見えるのは、2. 罽賓、4. 突厥、6. 舍衛、7. ソグド（胡国・胡）、11. インド、12. ウディヤーナ、13. 波斯、17. チベット、21. 唐の9件だけであり、それ以外のタジク・東ローマ・キルギス・ウイグルなどの大国を含む13件は蕃漢対照東洋地図にのみあって、『梵語雑名』には現れない。ところが逆に、『梵語雑名』には「龜茲 = Kucīna」「于闐 = Korttana」「吐火（羅） = Tukhara」「迦閃弭<sup>かせんび</sup> = Kaśamira」、すなわちクチャ・コートアン・トハラ・カシミールという国名が現れている。このように『梵語雑名』は、これら唐と密接な関係にあった西域の主要部については蕃漢対照東洋地図より詳しい反面、西アジア～東地中海方面の大石や拂林も、中央ユーラシア草原東部地帯のキルギスやウイグルも、そして東南アジア方面の国・集団も見えない点では蕃漢対照東洋地図に比べて視野が狭いのである。

換言すれば、『梵語雑名』より蕃漢対照東洋地図の方が明らかにカバーする範囲が拡大しているわけである。先に『梵語雑名』に含まれる情報の年代は8世紀前半とみる方が自然であるとし、一方、蕃漢対照東洋地図の年代についてはこれを8世紀末～9世紀中葉と限定しておいたが、その推定は、時代の進行

につれて外国情報が詳しくなるという一般論と矛盾しない。つまり、古い『梵語雑名』の方が狭義の西域世界のみを示すのに対し、新しい蕃漢対照東洋地図の方ははるかに広く、少なくとも陸と海のシルクロードを通じて知り得た東洋世界、唐代の仏教徒から見れば全世界を把握しているのである。

以上縷説してきたように、少なくとも盛唐から中唐の終わり頃まで、漢語で「胡国」といえばソグド国、「胡」といえばソグド（人・言語）を意味するのが一般的であったという実態が確認できたであろう。もちろん私は唐代における胡俗の流行を示す胡服・胡帽・胡食・胡楽・胡粧の「胡」がすべてソグドであるとまで断言するつもりはない。しかしながら、こと「胡姫」に限っては、「ソグド人の女性」と断定してよいと考えるのである。その理由は次の通りである。

拙著『シルクロードと唐帝国』の第四・五章で詳述したように、胡姫の大半はソグド諸国からの献上品ないしシルクロードの奴隷貿易によって供給されたのである。そこで取り上げたソグド文女奴隷売買契約文書のみならず、漢文売買契約文書に見える女奴隷にもソグド人ないしソグド系突厥が際立っていたのは、決して偶然ではあるまい。また拙著第二章に見た通り、ソグド人のコロニーが唐代の北中国の交通路沿いの大都市のいずれにもあったことが、多くの研究者によって論証されているので、長安・洛陽・太原は言うに及ばず、それ以外的大都市にも胡姫のいる酒場や酒楼や妓館が遍在したと推定して大過なからう。胡姫は美しく、都会的センスがあったから唐文化の花形となりえたのである。もし胡姫が漢人やトルコ人・モンゴル人と同じモンゴロイドで、しかも北方草原の純粋遊牧民出身であったとしたら、そのまま唐の大都市に連れてこられて、流行の最先端をゆく目の肥えた人々の集まる社交界や繁華街で、耳目を集める瀟洒で美的な存在にはなにくからう。奴隷として買われた若い女性が、たとえ行儀作法の訓練を受けたとしても、やはり美的センスというものは一朝一夕で身に付くものではない。その点、ソグド人は元来オアシス都市の民であり、ソグド系突厥でさえ草原都市にいた可能性があり、しかも碧眼・白晢・高鼻・卷髪というコーカソイド的特徴は、なにもしないでも目を引いたであろう。胡姫はそのエキゾチックな容貌の上に西域の都市文化を体現したため



に、胡旋舞などの踊り子や西域音楽の歌手や演奏者として、あるいは遊女や酒場のホステスとしてもてはやされたに違いない。それゆえ私は、「胡姫」とは、些細な例外を無視すれば「ソグド人の女性」と断定してよく、しかもそこには「若くて美しい」という暗黙の諒解があったと考えるのである。

## 第六節 世界の四主説（四天子説）

初唐において、中華以外の地域への現地体験がとりわけ豊かであり、仏教世界と儒教世界を重ね合わせたパミール以東最大の知識人といえ、まず誰をさしおいても第一に指を屈すべきは玄奘である。その彼がインドから西域経由で唐に帰国した 645 年の翌年に完成した『大唐西域記』の巻一では、全世界を四つに区分し、それぞれに支配者がいるとする「四主説（または四天子説）」を紹介している。

この四主説は、インドで育まれた仏教の地理的世界観であり、東には「人主」、南には「象主」、西には「宝主」、そして北には「馬主」がいるとする。この四主のいる地方が具体的にどこであるかを玄奘自身は明言していないが、玄奘の仏典翻訳事業を補佐した道宣が、『大唐西域記』成立後まもない 650 年に著した『釈迦方志』では、東の人主の国を「至那国」、南の象主の国を「印度国」、西の宝主の国を「胡国」、北の馬主の国を「突厥国」としている。

また、やはり道宣が同時期に編んだ『続高僧伝』巻四・玄奘伝では、東と南は同じであるが、西の宝主の国を「波斯」とし、北の馬主の国を「獫狁」とする。この獫狁とは匈奴の古名で、北方草原の遊牧騎馬民集団の代名詞であるから、実質的には西の宝主の国を胡国とするか波斯とするかで「揺れ」ているだけである。

世界の四主説というのがインド起源であり、少なくとも 3 世紀にまで遡ることは疑いない<sup>(27)</sup>。そして唐代前半期のソグディアナの何国（クシャーニヤ）でもこの四主説が知られていたようであり、『新唐書』西域伝によれば、北が中華

(27) Cf. Pelliot 1923, pp. 97-98, 121-124; Stein 1959, p. 254; 海野 1956, pp. 19-22.

古帝，東が突厥・婆羅門，西が波斯・拂菻となっている<sup>28)</sup>。ここには中華を真ん中に置くという漢籍独特の作為が感じられ，本来ならば北に突厥，東に中華，南に婆羅門，西に波斯・拂菻があったはずである。

一方，時代を下ってみると，12世紀以降のチベット語文献にこの四主説は頻出する。それを網羅的に列挙したのは，チベットの伝説的英雄である「ケサル」の起源を追求したスタンであった。彼の研究によれば<sup>29)</sup>，チベットの四主説でも基本構造は玄奘由来の唐代中国の伝承と一致しており，東のシナと南のインドと西のタジクに例外は少ないのであるが，北だけは異同がはげしい。北の代表として頻出するのはホル（Hor）であるが，フロム（Khrom）やグルグ（Gru-gu）も現れ，しかもこれらが複雑に絡み合っているのである。グルグ（Gru-gu）とはドルグ（Dru-gu）の転訛形であって，正しい形のドルグ（Dru-gu）とはテュルク（Türk）すなわちトルコという名称のチベット語における音写形である。私の研究によれば，ドルグとはトルコ系民族の総称であり，ホルとはチベットから見て北方にいる漢民族以外の有力異民族で，且つチベットと直接領域を接している者の代名詞である<sup>30)</sup>。残念ながらホルについては未だに起源も語源も確定できないが，8世紀後半～9世紀にはトルコ系民族の代表であるウイグルを指し，13世紀からはウイグルではなくモンゴルを指すようになり，モンゴル帝国終焉後はさらに意味するところが変化していく。

スタンの後を受けて，こうした後代にチベットで伝承された四主説の元とみなせる最も古いテキストを発見したのはマクドナルドである [MacDonald 1962]。それはペリオがパリに持ち帰った敦煌文書（下限は11世紀初）の中にあるチベット語文書 Pelliot tibétain 958 である。そこでは，東は人を支配するシナの王，南は象と学問を支配するインドの王，西は獅子の国で商品を支配する「プロムのケサル（'Phrom Ge-sar）」，そして北は北方の駿馬を支配する「タジクとドルグの王たるブクチョル（Ta-zig tañ Dru-gu'i rgyal-po 'Bug-čor）」となっている。

タジクはイスラム帝国，ドルグはトルコ民族の総称であり，ブクチョルは8

28) Cf. 前嶋 1958-59, pp. 135-136; ドゥ・ラ・ヴェスィエール 2007, p. 108.

29) Stein 1959, chapitre VI (pp. 241-314), 特に pp. 254-261 の一覧表を参照。

30) 森安 1977, pp. 14-16, 35-45.

世紀前半にトルコ民族全体を支配した突厥第二帝国の第二代カプガン可汗の本名「黙啜」の音写である。確かに黙啜の治世も終わりに近い710～712年、突厥がトゥルギシュ（突騎施）を征服し、さらにタジク占領下にあったソグディアナから鉄門にまで遠征軍を進めて、一時的にせよタジクの東部領域を支配したという史実があるから、「タジクとトルコの王たる黙啜」という表現は8世紀初頭の一時期にはぴたりと適合する。

一方、プロム（'Phrom）とは漢字で拂林／拂菻あるいは普嵐と書かれるフロム（Frōm / Hrōm）、すなわち東ローマ帝国のことで、これは先のフロム（Khrom）の原形と見てよい。ケサル（Ge-sar）がローマ皇帝カエサルの名称に由来し、一般に皇帝の意味で使われるようになったという点は学界でも認知されているから、プロムのケサルとは東ローマ皇帝のことである。8世紀前半のシルクロード世界において、西の大国はササン朝の後継者たるタジクか、そうでなければ東ローマ以外にはありえない。東方へ向けて破竹の進撃を続けてきたタジク軍の勢いが、710年代初めに突厥によって止められ、さらに720～730年代にはトランスオクシアナにおいてトゥルギシュの大攻勢を蒙って退却を余儀なくされ、またトハリスタン～ヒンドウークシュ南麓においては突厥別部や同じくトルコ系のハラジュが優勢となり<sup>(31)</sup>、タジク側は全体的に劣勢となる。それゆえ P.t. 958 において西の代表がタジク王ではなく「プロムのケサル」となっている理由は、いちおう首肯できる。

ところがこうした状況のなかで、その理由はまだ不明ながら、実力的には東ローマ皇帝にはるかに及ばないカーブル地方のトルコ王（テュルクシャー、カーブルシャー）が、こともあろうに「フロムのケサル」と名乗るのである<sup>(32)</sup>。漢籍には罽賓国として現れるヒンドウークシュ南麓のカーピシー～カーブル～ガンダーラ地方で738／739年に即位した王の名称「拂菻罽婆<sup>(33)</sup>」が、恐らくは「拂

(31) Cf. 前嶋 1958-59, pp. 138-143, 160-171; 稲葉 2004, pp. 363-332（逆頁）。

(32) カーブルシャーがなにゆえに突然「ローマの皇帝」という大袈裟な名を取るに至るのかという疑問に答える試みがなくはない [cf. Uray 1979, pp. 297-298; Humbach 1983, p. 306] が、私には釈然としない。「カエサル」という名称の東方伝播の痕跡については、cf. Stein 1959, pp. 279-280。

(33) 『旧唐書』卷一九八, pp. 5309-5310 の罽賓国条。

蒜闍婆」の誤記であろうとはかねてより推測されてきたところであるが、フムバッハ等の努力により、この地域で出土したコインに“Fromo Kēsaro”という銘のあるものが発見され、その推測が確定された<sup>(34)</sup>。どうやらこの人物は、吐蕃のすぐ西隣りにあって、トルコ系仏教徒勢力の先頭に立ち、イスラム勢力に対する戦いに活躍し、また仏教王国として古来有名なコータンの王に娘を嫁がせたい<sup>(35)</sup>。それゆえ、この闍婆 = Kēsaro の名が、後にチベット・モンゴル仏教圏に流布する英雄伝説の主人公ケサル（モンゴル語ではゲセル）の起源になるというフムバッハ説 [Humbach 1987, p. 85] には、私も賛成したい。P.t. 958 の四主説においては「プロムのケサル（Phrom Ge-sar）」が西の代表であったにもかかわらず、12世紀以降のチベット語文献においてはケサルは正しく「フロムのケサル」と熟すだけでなく、ホルやゲルグとも結び付くようになる。そしていずれの場合もケサルが西の宝主の国ではなく、北の馬主の国の代表となる<sup>(36)</sup>のは、そもそもの起源となったカーブルシャー Fromo Kēsaro が Gru-gu = Dru-gu = トルコに含まれるハラジュ族の王であったからに相違あるまい<sup>(37)</sup>。こうして、元来は西方の代表であったはずの「ローマの皇帝」がどうして北方に回るのか、という学界積年の疑問は氷解するのである。

710年頃にはブハラ・サマルカンドというソグディアナの主邑がタジクの侵入を受けたが、その後すぐにソグド文化圏～トハリスタン～アフガニスタン北部に、反タジク勢力が結集したようである。これはまだ私の見通しに過ぎないが、そこに結集した反タジク勢力とは、即ちソグド諸国、トルコ系諸政権（セミレチエのトゥルギシュ、フェルガーナの西突厥別部、トハリスタンの西突厥別部、ヒンドウークシュ以南のハラジュなど<sup>(38)</sup>）、ササン朝亡命政権、さらにはそれらと密

(34) Cf. Humbach 1983; Humbach 1987.

(35) Cf. Emmerick 1967, pp. 68-69; Uray 1979, pp. 296-297. ただし、コータン王に嫁いだ Phrom Ge-sar 王の王女はカシミールからやって来たことになっている。カーブル～ガンダーラを支配した Fromo Kēsaro がその東方のカシミールまで領域を拡大したのか、単に出発地がカシミールだったかのいずれかであろう。

(36) Cf. Stein 1959, pp. 256-261, 270-278.

(37) ヒンドウークシュ以南のアフガニスタン北部に成立したハラジュ王国については、稲葉 2004 のお陰ではほぼ詳細がつかめるようになった。

(38) Cf. 前嶋 1958-59; 稲葉 2004.

接な関係にあり、時に表裏一体である仏教・ゾロアスター教・ネストリウス派キリスト教・マニ教などの宗教勢力である。もちろんここに、パミール地方からの西域進出を狙うチベット（吐蕃）が複雑な動きを見せるし、トゥルギシュも時にチベットと結んで唐と敵対したりするので、決して一枚岩ではない。それでも私は、710年前後から730年代にかけて、パミール以西の諸勢力から唐への遣使朝貢が頻繁に行なわれたこと、その中にササン朝亡命政権ないしその残党と思しき波斯〔cf. 第三節, 13. 波斯国の項〕や、ネストリウス派キリスト教徒集団とみられる拂菻〔cf. 榎 1944, pp. 214-215〕も混じっていたこと、719年にトハリスタンに隣接するチャガニヤンからマニ教団最高位の大慕闐（モジャク, možak）が派遣されたこと〔cf. 矢吹 1988, p. 46〕などの背景には、基本的に反イスラムの雰囲気がかきまわっていたと考えるのである。

さて、インドで育まれた仏教の地理的世界観である四主説が、7～8世紀の中国・チベット・クシャーニヤ、さらにはかなり時代は飛ぶが12世紀以降のチベットで、以上のように受け継がれていた。そういう背景を踏まえて上記の蕃漢対照東洋地図を見直せば、そこに描かれているのが当時の唐やチベットの知識人から見た全世界であって、私はこれを蕃漢対照世界地図と呼ぶことさえできると思うのである。8世紀前半の情勢を反映するP.t. 958では北方にまだホルが見えていないが、8世紀末～9世紀中葉の蕃漢対照東洋地図では「ホル＝廻骨国」が現れ、12世紀以降のチベット文献では北の代表としてホル（主にモンゴルの意）が頻見するようになる。一方、西の代表は7世紀に玄奘から情報を得ていた道宣の伝承ではソグドないしペルシア、8世紀のP.t. 958では東ローマ、そして12世紀以降のチベット文献では圧倒的にタジクとなるのであり、その中間に来る蕃漢対照東洋地図にはソグド・波斯・タジク・東ローマが渾然一体となって並列されているというわけである<sup>39)</sup>。

蕃漢対照東洋地図を本当の意味のユーラシア世界地図とまでは言えないのは、

39) ただし、本地図の波斯の場合はもはやササン朝ペルシアそのものではなく、タジクに追われてトハリスタンに亡命した地方政権にすぎないことは、本文中で既に述べた通りである。大突厥と回鶻が併存していたように、本地図の情報は決して同時代のものに限らないことに注意したい。

そこに、唐代になって東ローマ帝国本体を指す拂菻に替わって復活したはずの大秦という名称<sup>(40)</sup>が含まれていないし、また渤海・新羅・日本も入っていないからである。しかし別の見方をすれば、安史の乱以降に領土を縮小した唐にとって、もはや現実問題としては西の大国はタジク以外ではあり得なかったであろうし、渤海・新羅・日本などというのは漢文仏教文化圏である中華世界の一員に過ぎなかったから列記しなかったのかもしれない。つまり、従来の「東アジアの唐王朝」という見方を離れ、「ユーラシア大陸の唐王朝」は常に目を内陸に向けていたという前提に立てば、渤海・新羅・日本が現れないのは当然であり、やはり唐代仏教徒から見た世界地図といっても差し支えなからう。

さらにユーラシア史の視点から世界の四主説を見直せば、それは実によく現実の歴史地理を踏まえていると言えよう。早くからアジア史の基礎として風土に着目してきた松田壽男によれば、東の人主の国シナは東アジア農耕文化圏を代表し、南の象主の国インドは南アジア農耕文化圏を、西の宝主の国は西アジアから中央アジア西南部のソグディアナに至るオアシス文化圏を、北の馬主の国は北アジア～中央アジア北部の遊牧文化圏をそれぞれ代表しているのである<sup>(41)</sup>。

ところで実はこれまで、蕃漢対照東洋地図、並びにそれと一緒に筆写されている陀羅尼に、なぜ遣唐使たちが親しんだ梵字ではなく、馴染みの薄いチベット文字が使われたのかという当然の疑問に答えていない。正直なところ、確かな答えが見つからなかったのである。しかし、もし想像をたくましくすれば、次のように言えるかもしれない。安史の乱以降になると、唐の勢力は急激に衰え、チベットの吐蕃帝国が強大化し、河西回廊や西域南道一帯を占領しただけでなく、盛んに唐本土の西辺を脅かす。それでも、8世紀末までには吐蕃はますます立派な仏教国になり、820年代には唐やウイグル帝国とも対等の平和条約を結ぶほど友好的となる<sup>(42)</sup>。日本からの留学僧が長安でチベット人仏教僧と出会って交流を深め、共にユーラシア世界地理を学習したと想定しても、それ

(40) Cf. 白鳥 1931-44, pp. 510-513, 538-539.

(41) 松田 1971, 第III章, pp. 20-27.

(42) Cf. 森安 2007, pp. 350-353.

ほど荒唐無稽との誹りを蒙らないのではなからうか。

いずれにせよ、蕃漢対照東洋地図は現存する梵漢辞典と相俟って、唐前期を含む8世紀後半まで、陸のシルクロードが海のシルクロードよりはるかに重要であったことを如実に物語っている。言うまでもなくその状況は漢代以来のものであり、海の道からのムスリム商人の東方進出は主に9世紀になってから、すなわち安史の乱後の唐後半期になってからである。この動きが五代十国時代の呉越国、さらに宋王朝へと拡大していき、ついには杉山正明が多数の概説書で強調するように、モンゴルのクビライ時代に海と陸のルートがリンクする状況に立ち至り、そしてポスト=モンゴル期になると陸の道が相対的に凋落し、世界は海の時代へと突き進んでいくのである。

#### 参考文献目録：

池田 温

1990 『中国古代写本識語集録』 東京大学東洋文化研究所.

石田 幹之助

1941 『長安の春』 創元社, (復刻: 講談社学術文庫 403, 1979年)

石田 幹之助 (解説: 榎 一雄)

1967 『増訂 長安の春』 (東洋文庫 91), 平凡社.

稲葉 稜

2004 「アフガニスタンにおけるハラジュの王国」『東方学報』76 (2003), pp. 382-313 (逆頁).

海野 一隆

1956 「世界区分説としての四主説——シナおよび日本での受容——」『東洋地理学史研究 大陸篇』 清文堂出版, 2004, pp. 18-30. (初出: 『田中秀作教授古稀記念地理学論文集』 柳原書店, 1956.)

榎 一雄

1942 「ササン朝末期の王統に関する両唐書波斯伝の記載に就いて」『榎一雄著作集』第3巻, 汲古書院, 1993, pp. 193-209. (初出: 『北亜細亜学報』1, 1942.)

1944 「唐代の払荊国に関する一問題——波斯国酋長阿羅憾丘銘の払荊国——」『榎一雄著作集』第3巻, 汲古書院, 1993, pp. 210-243. (初出: 『北亜細亜学報』3, 1944.)

大谷 勝真

1913 「宰利に就きて (一・二)」『史学雑誌』24-11 & 24-12, pp. 1427-1452 &

pp. 1563-1585.

熊本 裕

1985 「Hagaŭſta. sūli.」『IBU四天王寺国際仏教大学文学部紀要』17, pp. 1-22.

桑山 正進(訳注)

1987 『大乘仏典 中国・日本篇 9 大唐西域記(抄)』中央公論社.

桑山 正進(編)

1992 『慧超往五天竺国伝研究』京都大学人文科学研究所。(復刻再版:臨川書店, 1998.)

白鳥 庫吉

1904 「大秦国及び拂菻国に就きて」『史学雑誌』15-4, 15-5, 15-8, 15-10, 15-11.(再録:『白鳥庫吉全集』第7巻, 岩波書店, 1971, pp. 125-203.)

1924 「粟特国考」『東洋学報』14-2.(再録:『白鳥庫吉全集』第7巻, 岩波書店, 1971, pp. 43-123.)

1931 「大秦伝に現はれたる支那思想」『桑原博士還暦記念東洋史論叢』(再録:『白鳥庫吉全集』第7巻, 岩波書店, 1971, pp. 237-301.)

1931-44 「拂菻問題の新解釈」『東洋学報』19-3 (1931), 20-1 (1932), 29-3/4 (1944).(再録:『白鳥庫吉全集』第7巻, 岩波書店, 1971, pp. 403-592.)

(なお以上の四点は白鳥庫吉『西域史研究』下巻にも再録あり.)

1970 「支那本土周圉諸民族」『白鳥庫吉全集』第4巻, 岩波書店, pp. 549-739.

高楠 順次郎

1914 「梵語千字文の著者」『仏書研究』3, pp. 1-5.

寺本 婉雅

1931 「我が国史と吐蕃との関係」『大谷学報』12-4, pp. 44-83.

ドゥ・ラ・ヴェスイエール, エチエンヌ

2007 「サマルカンドにおける世界の王, トルコ人」羽田正(編)『ユーラシアにおける文化の交流と転変』東京大学東洋文化研究所, pp. 105-119.

羽田 亨

1913 「波斯国酋長阿羅憾丘銘」『羽田博士史学論文集 下巻 言語・宗教篇』京都大学文学部東洋史研究会, 1958, pp. 385-395.(初出:『東洋学報』3-3, 1913.)

前嶋 信次

1958-59 「タラス戦考(1~2)」『史学』(1) 31-1/4, pp. 657-691, (2) 32-1, pp. 1-37.(再録:同氏『東西文化交流の諸相』誠文堂新光社, 1971, pp. 129-200.)

松田 壽男

1941 「崑崙国攷」『国学院雑誌』47-1.(再録:『松田壽男著作集』第4巻, 六興出版, 1987, pp. 251-275.)



- 1971 『アジアの歴史——東西交渉からみた前近代の世界像——』（同時代ライブラリー122），岩波書店，1992。（初版：日本放送出版協会，1971．再刊：『松田壽男著作集』第5巻，六興出版，1987．）
- 水谷 真成（訳注）
- 1971 玄奘『大唐西域記』（中国古典文学大系 22），平凡社．
- 壬生 台舜
- 1963 「我が国に伝わる最古のチベット語文書」『岩井博士古稀記念典籍論集』大  
安，pp. 679-684．
- 宮林 昭彦／加藤 栄司（訳注）
- 2004 義浄『南海寄帰内法伝』法蔵館．
- 無名氏
- 1916 「梵語雑名の選者」『仏書研究』22，pp. 4-6．
- 護 雅夫
- 1967 『古代トルコ民族史研究 I』山川出版社．
- 森安 孝夫
- 1977 「チベット語史料中に現われる北方民族——DRU-GU と HOR——」『アジア・アフリカ言語文化研究』14，pp. 1-48，（French summary）pp. 1-2．
- 1984 「吐蕃の中央アジア進出」『金沢大学文学部論集 史学科篇』4（1983），pp. 1-85，+2 pls．
- 1985 「チベット文字で書かれたウィグル文仏教教理問答（P. t. 1292）の研究」『大阪大学文学部紀要』25，pp. 1-85，+1 pl．
- 2007 『シルクロードと唐帝国』（興亡の世界史，第5巻），講談社．
- 矢吹 慶輝（校訂・解説：芹川 博通）
- 1988 『マニ教と東洋の諸宗教』佼成出版社．
- 吉田 豊
- 1994 「ソグド文字で表記された漢字音」『東方学報』66，pp. 380-271（逆頁）．
- 2000 「オアシスの道——玄奘は何語で旅をしたか」『月刊言語』2000-6，pp. 39-43．
- Bagchi, Prabodh Chandra
- 1929-37 *Deux lexiques sanskrit-chinois. Fan-yu tsa-ming de Li-yen et Fan-yu ts'ien-tseu-wen de Yi-tsing*. 2 vols., (Sino-Indica. Publications de l'Université de Calcutta, Tom. 2-3), Paris: Librairie Orientaliste Paul Geuthner.
- Beckwith, Christopher I.
- 1987 *The Tibetan Empire in Central Asia*. Princeton: Princeton University Press.
- Emmerick, R. E.
- 1967 *Tibetan Texts Concerning Khotan*. (London Oriental Series 19), London / New York / Toronto: Oxford University Press.

Enoki, Kazuo

- 1981 "A History of Central Asian Studies in Japan." *Acta Asiatica* 41, pp. 95-117.

Humbach, Helmut

- 1983 "Phrom Gesar and the Bactrian Rome." In: P. Snoy (ed.), *Ethnologie und Geschichte. Festschrift für Karl Jettmar*, Wiesbaden: Franz Steiner Verlag, pp. 303-309.
- 1987 "New Coins of Fromo Kēsaro." In: G. Pollet (ed.), *India and the Ancient World. Professor P.H.L. Eggermont Jubilee Volume*, (Orientalia Lovaniensia Analecta 25), Leuven: Departement Oriëntalistiek, pp. 81-85, +3 pls.

MacDonald, Ariane

- 1962 "Note sur la diffusion de la "théorie des quatre fils du ciel" au Tibet." *Journal Asiatique* 1962, pp. 531-548.

Pelliot, Paul

- 1914 "Sur l'origine du nom de Fou-lin." *Journal Asiatique*, mars-avril 1914, pp. 497-500.
- 1923 "La théorie des quatre fils du ciel." *T'oung Pao* 22, pp. 97-125.

Stein, R.-A.

- 1959 *Recherches sur l'épopée et le barde au Tibet*. (Bibliothèque de l'Institut des Hautes Études Chinoises 13), Paris: Presses Universitaires de France.

Uray, Géza.

- 1979 "The Old Tibetan Sources of the History of Central Asia up to 751 A.D.: A Survey." In: J. Harmatta (ed.), *Prolegomena to the Sources on the History of Pre-Islamic Central Asia*, Budapest: Akadémiai Kiadó, pp. 275-304.

Zieme, Peter.

- 1992 "Alternative Übersetzungen in alttürkischen buddhistischen Werken." In: Ch. Fragner / K. Schwarz (eds.), *Festgabe an Josef Matuz. Osmanistik - Turkologie - Diplomatie*, (Islamkundliche Untersuchungen 150), Berlin: Klaus Schwarz Verlag, pp. 343-353.

appointment for military officials was similar to the *keshik* system of the Mongol empire. On the other hand, the majority of the civilian bureaucracy was made up of Han people who had submitted to the Tangut. The existence of two methods of bureaucratic appointments not only united the various Tangut clans in the Tangut state that was constructed upon the land of the conquered Han people, one can also discern an effort of the regime to maintain the government system by having the conquered Han people participate in the government. The existence of this type of bureaucratic appointment system demonstrates one of the characteristics of the central Eurasian type of state, such as Xi Xia that enrolled various peoples into a regime that was maintained for over one hundred after its founding and lasted until the latter half of the 12<sup>th</sup> century.

## THE *HU* (SOGDIAN) DURING THE TANG DYNASTY AND BUDDHIST WORLD GEOGRAPHY

MORIYASU Takao

Who was the famed *Huji* 胡姬 (Jp. *Koki*) who appears in Ishida Mikinosuke's 石田幹之助 *Chôan no Haru* 長安の春 (Changan Spring) and who was celebrated in Tang poetry as the ideal of the charming woman of the Tang. Mistaken or imperfect explanations, such as that she was Persian or of Iranian extraction or less frequently that she came from one of the nomadic peoples of the north, abound even today. However, I have defined *Huji* as "young Sogdian woman" on the basis of the meaning of the Chinese characters that make up her appellation, and considering the historical circumstances, I would like to have her understood as "a beautiful, young Sogdian woman who entranced the world with the music and dance of the western regions during the Tang dynasty." In order to do this, I first make a comprehensive introduction of historical materials, some previously known and others heretofore unknown, to verify that the word *Hu* meant Sogdian during the Tang dynasty. Central to the argument here are the *Bongo zômyô* 梵語雜名, a dictionary of Sanskrit and Chinese vocabulary that was imported to Japan from Tang during the Heian period and a map of the Asian world written in Chinese and Tibetan. To these I have added documents in Chinese and Tibetan that have been excavated from Dunhuang and Turfan and records written in ancient Turkic found on stelae in Mongolia.

Historians in post-World War II Japan who have shared the point of view of

“Japan in East Asia” have drawn a rich historical portrait. There are, of course, points among their conclusions that deserve high evaluation, but in the approach of creating an “East Asian History” that is the stage for Japan, I feel there has been an overemphasis on the vision of the Tang dynasty as tilted toward the East. In my recent book *Shirukurôdo to Tôteikoku* (The Silk Road and the Tang Empire), by Kôdansha, I have advocated the resurrection of the proper view of “Tang dynasty of the Eurasian continent,” rather than the antithetical view of “Tang dynasty of East Asia” and have tried to describe this view. This article supplements the arguments that were not fleshed out in that work. In other words, in order to investigate how educated figures of the Tang recognized the geography of Eurasian world, in which Asia occupied the core, I made use of a map of the Asian world recorded in Chinese and Tibetan, as noted above. Furthermore, I analyze the well-known “theory of the four lords (sons of heaven) in the world”. I then bolster my argument in the book that Tang was an empire situated in the eastern portion of the Eurasian continent and its relationship with central Eurasia through the overland Silk Road was most important, and at the same time I advocate expanding our perspective beyond the framework of “Japan in East Asia” to move toward “Japan and the Eurasian world.”

## THE MAMLUK REGIME AND *WAQF*: THE STRUCTURE OF THE MILITARY RULE IN THE PERIOD OF THE DECLINE OF THE *IQṬĀ'* SYSTEM

IGARASHI Daisuke

With the implementation of the highly systematic and well organized *Iqṭā'* system, which depended on the completion of the cadastral survey (1313-25), referred to as *al-rawk al-Nāṣirī*, in Mamluk ruled Egypt and Syria (1250-1517), the Mamluk state and political system were constructed on this foundation. In this manner, the regimes of foreign military rulers, which were based on the *Iqṭā'* system, which had been developed in the Arab-Muslim world since the latter half of the tenth century, reached an apex in the highly systematized Mamluk regime. As the fundamental land system of the period, the *Iqṭā'* system served as the axis of political, military and governmental systems and formed the system that was the core of the ruling structure in which the Mamluks, who comprised the ruling class, controlled rural areas through possession of the *Iqṭā'* lands and thereby held a grip